

日麗関係の変質過程：関係悪化の経緯とその要因

MIZOKAWA, Kohji / 溝川, 晃司

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

1

(開始ページ / Start Page)

75

(終了ページ / End Page)

96

(発行年 / Year)

2003-10-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022558>

日麗関係の変質過程

— 関係悪化の経緯とその要因 —

溝 川 晃 司

はじめに

当然の事実ではあるが、日本と朝鮮半島の関係は古代より脈々と続き、交流と摩擦を繰り返してきた。「摩擦」の大きなものでは、統一新羅シルラとの対立や、蒙古襲来、倭寇、文禄・慶長の戦役（壬辰・丁酉倭乱イムジン・チヨンウウエラン）、近代の侵略と植民地支配、そして現代の日朝関係が挙げられる。一方、「交流」の面では、百濟ペクチェよりの仏教公伝に代表される古代の先進文化の伝播、渤海ハクセと日本の良好な関係、高麗前半期の日本からの進奉貿易、江戸期の朝鮮通信使、現代の日韓関係等が相当するだろう。

このような「交流」と「摩擦」の併存は、歴史上いつの時代にもどこの国家間にも見られることである。今挙げたものは大まかな傾向に過ぎない。交流が起こるからこそ摩擦が発生するのであり、交流がない地域間には当然ながら摩擦さえ発生しない。換言すれば、近隣諸国間では交流も多いが摩擦も多く、遠隔諸国間の関係は交流も少ないが摩擦も少なくなる、ということである。その意味では、この「摩擦」と「交流」の時代という区分は正確ではなく、大

まかな傾向を示すものでしかない。小さなレベルでの「交流」と「摩擦」を列挙すればきりがないので、必然的に大まかな傾向で見ていくのが有効となる。

朝鮮半島の高麗王朝の時代は十世紀前期から十四世紀末期に相当し、日本では平安中期から南北朝期にあたる。この間の両者の外交関係を巨視的に見ると、前半は比較的良好な関係であるが後半は非常に険悪となっていく。言うまでもなく蒙古襲来が一つの分岐点となっているが、微視的ではそれだけでない様々な要因がその分岐点を形成していることを示している。今回、前半は比較的良好な関係にあった日麗関係が、後半になると非常に険悪になる諸要因について考察を加えてみたい。

ひとくちに「日本」といっても、中央政府（朝廷または幕府）と地方では一つの政策に関して、大なり小なり対応の差が見られる筈である。特に、朝鮮半島・中国大陸に近く、琉球諸島とも交流があった北九州地域では、必ずしも「中央」の指示通りの「外交」が行われていた訳ではない。もちろん京都や鎌倉の指示を仰ぐことも多々見られたが、時には「地方」独自の判断で外交を行い、「外国」への「最前線」として独自の対応を取ってきた。このような多国籍文化の交差点とも言うべき環玄界灘・黄海地域（日本では北九州地域が相当する）は、従来認識されているような単一的な「日本」という概念で一括りする訳にはいかない。本稿では、「一地方」として多国籍問題に直面した「日本」の、高麗との関係・交渉を見るところの意味合いも持っている。

日麗関係史は、古くは青山公亮氏、森克己氏等の研究に代表され、近年では李領氏¹の著述が挙げられる。李領氏の著作は高麗のほぼ全期を通じて研究しているもので、まさに日麗関係史の基礎論文とも言うべきものである。私は李領氏の研究を踏まえ、日本の地域交流が悪化していく経緯について調べてみたい。なお、この「前半」と「後半」の境界は十三世紀にあるので、この時代を中心に見ていく。

一、日麗關係悪化への経緯

平安後期から行われていた私献貿易・進奉貿易は、あくまで地域的な私的交流であり、中央政府が殆ど関知せぬものであった。この時期の交流は概して平和的であった。鎌倉後期から南北朝時代に見える前期倭寇全盛期と違い、血なまぐさい事件や衝突はさほど見られない。

日麗關係史後半の、緊張關係の象徴とも言える倭寇が史料上最初に確認出来るのが一二二三年（貞応二年、高宗十年）である（後述）⁽³⁾。しかし日麗關係の摩擦はそれ以前に既に発生している。一二〇六年（建永元年、熙宗二年）に金州防禦使から対馬に宛てて出された牒にその端緒が伺える。

高麗國金州防禦使 牒 是印也 日本國對馬嶋、

當使准越、今年上月十有四日、貴國使介明頼等四十人、乗船三艘、來泊乎州南浦、使譯語問其所以來者、號稱進奉、兼獻文牒牒道、其文其爲擾雜、其語過勿恭、非進奉之禮也、大抵兩國相通文牒、必指於某國其州例有恒矣、往年秋八月恒平等十一人所賣來文牒徒以讒諛之事、直指牒京朝、禮賓省其可以任意而交受、平具事呻報朝廷、朝廷之議不上於一、而使之遣還金此一字消賣來、此亦失禮之甚矣、當券廉察使更傳報于朝廷、朝廷共不許其交接、使之解纜發遣故所、賣來文牒、及進奉萬物率皆還給、以送其數目錄于後想、宜知悉右事須牒、

泰和六年二月 日 牒

官 直 韭 二

牒後還送、

進奉物目、

圓鮑貳仟帖、

黒蛇貳仟果、

鹿皮參拾枚、

原

これは故藤原親経が所蔵していた家の文書の中にあつたものを平経高が書写したものであり、『平戸記』延応二年（一二四〇）四月十七日条に見えるものである。従つて一二〇六年当初の記録にはこの記事は見い出せない。泰和六年は金の年号であり、この時高麗は金の年号を使用していた。一二〇六年の上月（正月か）に対馬介明頼ら四十人が使者として派遣された。進奉目的であつたがその提出した牒状が「其文其爲擾雜、其語過勿恭、非進奉之禮也」というひどいものであつたため、追ひ返された上に目録と進奉物も返却されたものである。

その前年（一二〇五年）にも恒平なる者がもたらした牒の文言が「徒以讒諛之事」というものであつた。また、宛名が高麗の礼賓省となつており、対馬から開京ケギョウの中央政府に向けて直接牒を出したことが外交儀礼に反したらしい。さらに使者が金某をつれて還つてきたことが何か気に障つたようであり、「此亦失禮之甚矣」とされている。進奉の使節が送り返されたのは、管見の限りではこの二年続けての二例が初めての事例である。ここに、日麗間の地域交流が摩擦を帯び始める端緒があるように感じる。

李領氏もこのことに関して同様の論述をしているのだが、同氏は高麗に拒絶される牒状が作られた理由として、以下のような推測をしている。つまり、国使介明頼等四十人と恒平等十一人は「高麗貿易をめぐる競争関係にあつた」と推測し、高麗が「このような対馬島側の事情とは関係なく、対馬島に対して所定の「進奉」内容にふさわしい牒状を要求したものの、対馬島側は内部の紛争によってこれに応じることができなかつたため」と解説している⁴。

李領氏の言うところでは対馬内部で一種の内紛があり、それが進奉貿易に影響したということであるが、明頼側と恒平側が競争関係にあることを示すものは先の牒状からは伺えない。先に高麗に至つた恒平が追ひ返された理由とし

て、文牒の体裁が「讒諛之事」であったこと、中央政府に宛てて直接牒を出したこと、使者が金某を遣し還したことが「失禮之甚」であったことが考えられる。気になるのが「讒諛」という表現である。恒平側が誰か他の立場の者を悪し様に高麗側に吹聴しへつらっている訳であり、李氏はこれを以て明頼側と恒平側との対立と判断したものと思われる。しかし恒平が「讒諛」した対象が誰なのか、ここから判断するのは難しく、明頼側と即決する訳にはいかならないのではないか。

明頼は「貴國介明頼」と記されており、対馬介であったことは明確であるが、恒平については何も表記されていない。ここから推測すると、恒平は対馬の人間ではない可能性もある。平安期の私献貿易で高麗に至った派遣された使者は、対馬の他に壹岐・薩摩・筑前からの名が見える。⁵⁾つまり対馬の進奉貿易が莫大な利をもたらすことを知った地域の間人が、対馬を「讒諛」したという可能性もあるのではないか。一二六三年にもたらされた高麗の牒には、進奉船は年一回二艘までという規定がなされていた。⁶⁾一二〇五年も同じ規定だったかは不明であるが、いずれにしても高麗との繋がりは「狭き門」であり、他地域の者からすれば対馬を蹴落とす必要がある。高麗との関係は確かに対馬が一番深い⁷⁾が、先に見た私献貿易や、一四世紀以降の被虜朝鮮人送還による回賜貿易には、対馬以外の玄界灘周辺地域からも朝鮮半島へコンタクトを取っている。以上の点から考えると、対馬と玄界灘他地域との間に、進奉資格をめぐる競争が存在した可能性もあるのではないか、それが恒平の「讒諛」が示すものではないか。

その翌年に来航した明頼であるが、こちらが追い返された理由は、牒状の体裁が「其文其爲擾雜、其語過勿恭、非進奉之禮也」というものによる。明頼側は、他者を讒言した形跡はないようだが、進奉にしては失礼であり、通好の最低の儀礼を満たしていなかったことが伺える。

つまりここから見ると、恒平と明頼はともに通好を求めるも、どちらも通好儀礼に不備があり、拒絶されるに至った。この両者が競合関係にあるかどうかは不明確だが、たとえ相手を悪し様に言うことはあっても、肝心の高麗に対

する外交姿勢には充分気をつける筈であろう。なぜなら、充分に礼をつくして高麗のお墨付きを貰い、競合相手の排除を狙うからである。ところが恒平にしても明頼にしても進奉対象に対して礼を欠くものであった。このことから、私はこの両者が競合関係にあったことが原因ではなく、両者が「進奉」する相手を軽んずる言動を取ったことが原因であると思うのである。

さてこのように、一二〇五年・〇六年と相次いで日本からの進奉が拒絶されたことは何を意味するのか。まず明確に言えることは、日本人の、高麗に対する外交姿勢の弛緩である。私献・進奉貿易といった地域交易が見られた端緒が一〇七三年（延久五年、文宗二十七年）であるが、それ以来、断続的にもとりあえず地域交易は続けられた。その間、牒状の表現の失礼を理由に追り返された事例は、管見の限り見えない。それが十三世紀に入って間もなく、外交礼を欠くことを理由に拒絶された。ここに、長年私献・進奉貿易に携わってきた日本人に、高麗に対する外交姿勢の緩みが出てきたのではないかと推測する。その弛緩の原因は不明であるが、日本からの来航者のもたらす牒状に失礼の表現が目立ちはじめ、高麗にとっても許容出来なくなったのではないかと推測する。そしてこの摩擦がきっかけとなり、後述するが一二二七年（安貞元年、高宗十四年）まで進奉貿易の廃絶となったと思われる。なお、この一二〇五年・〇六年は高麗では熙宗元年・二年にあたることから、即位したばかりの熙宗により外交礼儀が厳格化されたという可能性も考えられる。

進奉貿易が廃絶されるに至って、史料上に初めて「倭寇」の文字が見えるのが一二三三年（貞応二年、高宗十年）で、『高麗史』には「倭寇金州」としか記されていない¹⁰。これは田中健夫氏の言うように、「倭、金州二寇ス」と読むべきである。従ってまだ「倭寇」という語が成立していない段階と言える。田中氏はこの『高麗史』の記事を指し「成語あるいは歴史的觀念としての倭寇にはなっていない」と説いているが、「倭寇」という名詞形で書かれていないなら則ち倭寇に非ず、というのは不自然である。以後の倭寇との特筆すべき差異はそれほど感じられないので、

「倭寇」という語が成り立っていなくても倭寇と判断して差し支えないように思う。この時に倭寇が発生した要因は、高麗側により進奉貿易が拒絶されたことではないかと思われる。李領氏が指摘しているように、高麗から至近距離にある対馬は面積狭小にして農耕に適さず、漁撈か交易に活路を見いださねばならなかったからである。高麗との交易が絶たれるのは、まさに死活問題であつたらう。それは、対馬守藤原親光の羽振りの良さを描写した『吾妻鏡』が良く示している。¹⁴ 関係が良好な際には大きな利益を稼ぐことができた。しかし関係が良好でない場合はどうなるか。青山公亮氏が説くように、商人と海賊はいわば紙一重の関係であつて、「進奉者の苦境が増大するに伴いその一部の者を駆つて不穩の行動を取るに至らしめる」¹⁵ものであつた。以上を考慮すると、最初の「倭寇」発生最大の理由は、進奉貿易の拒絶によつて苦境に立たされた玄界灘の海民達によつて、平和的手段から暴力的手段へと転換したからではないかと思われる。ただし、青山氏は「高麗の拒否的政策が有力な原因」としているが、高麗のみが元凶ではなく、日本側の弛緩した外交姿勢が高麗を怒らせたという面もあり、非は日本側にもあるように感じる。

そのような初期倭寇の行動は一二二三年から数年見える。一二二五年四月の慶尚道沿海州、一二二六年正月に同じく慶尚道沿海州、¹⁶ 同年六月の金州、一二二七年五月の熊神県、¹⁷ といった具合である。進奉貿易廃絶の契機と思われる一二〇六年から一二二三年までの約十八年もの間になぜ倭寇が発生しなかったのか、逆にいえばなぜ進奉貿易廃絶から約十八年も経過してから発生したのか、という点は不明である。ともかくこの頃から急に倭寇の活動が始まるのだが、嘉祿三年（安貞元年、高宗十四年、一二二七）五月に、ついに高麗から抗議の牒状が至る。差出は高麗国全羅州道按察使で、大宰府に宛てたものである。

高麗國全羅州道按察使牒（印）日本國惣官大宰府當使

准彼國對馬嶋人古來貢進邦物、歲修和好、亦我本朝從其所使、特營館舍、撫以恩信、是用海邊州縣、島嶼居民、特前來交好、無所疑忌、被告金海府、對馬人等舊所住依之處、奈何、於丙戌六月乘其夜寐、入自城竇、奪掠正屋

訖、比之已甚、又何邊村塞、擅使往來、彼此一同無辜百姓侵擾不已、今者、國朝取問上件事固當職差承存等二十人管牒前去、且元來進奉禮制、廢絕不行、船數結多、無常住來、作爲惡事、是何因目由、如此事理、疾速廻報、右具(印) 前事湏牒、日本國惣官、謹牒、

丁亥二月日(印) 牒

副使兼監倉使轉輪堤默刑獄兵馬公事龍虎軍郎將兼三司判官趙判²¹⁾

この牒状内で「且元來進奉禮制、廢絕不行」とあることが、久しく進奉関係が行われていなかったことを示しており、先の一二〇六年の明頼が追い返されてからこの時まで廢絶していたものであろう。

さて注目すべきは大宰少式武藤資頼の対応である。『高麗史』同年五月乙丑条には以下のように書かれている。

乙丑雨電 日本國寄書謝賊船寇邊之罪、仍請修好互市、

さらに『百鍊抄』同年七月二十一日に次のような史料が見える。

廿一日、於關白直廬有議定事、左大臣已下參入、去年對馬國惡徒等向高麗國全羅州、奪取人物、侵陵住民事、可報由緒之由牒送、太宰少貳資頼不經上奏、於高麗國使前捕惡徒九十人斬首、輸送返牒云々、我朝之耻也、牒狀無禮云々、²³⁾

大宰府は抗議を受けると即座に謝罪を行うと共に貿易回復を要請した。その後、悪徒を逮捕して高麗使目前で斬首に処し、高麗の面目を立てている。これは李領氏の説くように、幕府によってこの年四月に出された悪党退治命令²⁴⁾を受けたものであり、武藤資頼自身が「日宋貿易の担い手であり、現地の責任者として、航路の安全確保のためには、高麗との親善関係を維持する必要があったから」²⁵⁾である。まさに正論ではあるが、この説明では、資頼が高麗との対外関係しか重視しなかったように聞こえる。李領氏の言うように、資頼にとつて高麗との親善関係維持が最も重要であった。さらに彼の行動に史的意義を見つければ、進奉貿易復活の要請をしたことについてもっと評価されても

よいのではないか。つまり資頼は単に謝罪をしたのではなく、高麗側により一方的に拒絶されている進奉貿易の復活を要請した。そして、恐らくその内諾を得たであろう後の同年七月に、捕らえた悪徒九十人を斬首に処し高麗の面子を立てている。このようにして、高麗の事情を汲んであくまで友好的処置を取り、かつ玄界灘の海民の不満の解消に務めているのである。資頼は、進奉貿易廃絶が彼等の大きな痛手になることを知っていたものと思われる。悪徒を厳罰に処すと同時に、「ガス抜き」に努め、将来の倭寇再発防止を狙ったものであった。このように武藤資頼は、高麗に対しては対外的友好姿勢を崩さず、かつ玄界灘の海民の不満を解消させ、日麗関係の維持に努めた。彼の外交手腕は見事と言うべきだが、その功績が不当にも大して評価されていないように感じるのは私だけだろうか。

こうして進奉貿易は復活したが、倭寇は断続的に発生している。一二三二年閏九月の鏡社住人の珍宝略奪⁽²⁶⁾、一二六三年二月の金州襲撃⁽²⁷⁾、一二六五年七月に発生した南道沿海州郡襲撃⁽²⁸⁾、という具合である。それでも一二三三年から二七年の事例のように連続的には発生しておらず、進奉貿易復活による玄界灘海民の「ガス抜き」は一応成功したのもと思われる。

これら初期倭寇は、一三五〇年以後に本格化する前期倭寇（いわゆる「庚寅年以降の倭寇」）と比較すればまだまだ少なく、かつ小規模である。しかし高麗政府は度々日本に抗議を行っている。日本への遣使は一二四〇年四月、一二五九年七月、一二六三年四月、⁽³⁰⁾の三回が確認できる。そのうち一二四〇年（延応二年、高宗二十七年）のものはその内容が不明であるが、一二五九年（正元元年、高宗四十六年）と一二六三年（弘長三年、元宗四年）のものは明確に倭寇について抗議を行っている。一二六三年四月のものは、二月の金州襲撃事件を受けてのものだが、一二五九年の少し以前に倭寇事件が発生したという記事は見えない。これは史料上に記録されなかっただけで、この以前にも度々倭寇の襲撃事件があったものと思われる。日本側の対応としては、一二五九年の時のものは不明であるが一二六三年ものは確認できる。一二六三年という年は日麗間の交流と摩擦が複雑に絡み合っている興味深い年である故、こ

の一年の両国関係の動きを見てみる。

(二月) 癸酉、倭寇金州管内熊神縣勿島、掠諸州縣貢船、⁽³²⁾

(四月) 甲寅、(中略) 遣大官署丞洪汙・詹事府錄事郭王府等、如日本國請禁賊牒曰、自兩國交通以來、歲常進奉一度船不過二艘、設有他船枉憑他事濫擾、我沿海村里嚴加徵禁、以爲定約越、今年二月二十二日貴國船一艘無故來入我境內熊神縣界勿島、略其島所泊我國貢船所載多般穀米并一百二十石・紬布并四十三匹、將去又入椽島、居民衣食資生之具盡奪而去、於元定交通之意甚大乖反、今遣洪汙等、賫牒以送詳公牒并聽口陳窮推上項奪攘人等盡、皆徵沮以固兩國和親之義、⁽³³⁾

(六月是月) 日本官船大使如眞等將入宋求法、漂風僧俗并二百三十人泊開也召島、二百六十五人到群山楸子二島、大宰府少卿殿白商船七十八人自宋將還本國漂風失船以小船泊宣州加次島、命全羅道按察使、給糧船護送其國、⁽³⁴⁾

(七月) 乙巳、日本商船三十人漂風到龜州艾島、命賜糧護送、⁽³⁵⁾

(八月) 戊申朔、洪汙・郭王府等自日本還奏曰、窮推海賊乃對馬島倭也、徵米二十石・馬黍三十石・牛皮七十領而來、⁽³⁶⁾ これらの史料を見ると、この年二月に金州に倭寇が進入、四月に高麗より洪汙^(ホシナ)と郭王府^(カクワンフ)が派遣され倭寇について抗議、七月と八月には、高麗が漂流した日本人に食糧を与えて護送、八月には洪汙等が帰国した際、日本より賠償として米・馬黍・牛皮が支払われたことが伺える。李領氏はこの高麗の抗議に触れ、進奉関係は少なくともこの時まで「断続的ながらも依然として維持されていたのではないか」と推測している。⁽³⁷⁾ その間に発生した日本船漂着事故には、高麗政府は食糧を与えて帰国させるといふ、極めて友好的措置を取っていることも忘れてはならない。日本側としても賠償を支払うという誠意ある対応を行った。これらの事から、一二六三年は交流と摩擦が入り交じり、日麗関係が徐々に悪化していく様子をよく象徴する年と言えり。

李領氏は高麗への進奉関係が終焉した時期について、「一二六六年十一月、蒙古から日本の入朝を促す詔書が高麗

に送られたことに求められる」としている。³⁸つまり、蒙古襲来という、日本と大陸の関係が非常に険悪なものになった事件が、それまでの一種の地域交流とも言うべき進奉関係を終わらせることになったということであろう。確かにその通りであり、蒙古襲来がその契機となったことには私も異存はない。ただしより詳細に見ると、「一二六六年」(文永三年、元宗七年)よりもう少し下るのではないかと思う。

その根拠としては、『高麗史』「世家二十七」元宗十三年(一二七二)七月の次のような史料が挙げられる。

秋七月甲子、倭船到金州、慶尚道按撫使曹子一恐交通事覺獲譴于元、密令還國、洪茶丘聞之嚴鞫子一、馳聞于帝、³⁹元宗十三年七月に金州に倭船がやって来たところ、慶尚道按撫使である曹子一は高麗と日本が通好していることが元に発覚するのを恐れ、密かに帰国させてしまった。ところが洪茶丘がこのことを耳にし、曹子一を厳しく責め糺した挙げ句、世祖フビライに報告したということである。同じ『高麗史』列伝四十三の「洪福源」の項には以下のように記されている。⁴⁰

明年倭船泊金州、慶尚道安撫使曹子一恐元責交通、密令還、茶丘聞之嚴鞫子一、鍛鍊以奏曰、高麗與倭相通、王遣張暉請故子一囚、一日茶丘遽還元人莫知、其故王慰諭之、

「恐交通事覺獲譴于元」という表現が示す通り、高麗と日本の間で少なからず交流があった事実を元帝国に知られなくなかったという高麗内部の事情が伺える。その理由は、やはり日本への来朝仲介の任務を、高麗側が忌避した事が挙げられる。このことは李領氏の著作にも詳しいが、宰相李蔵用が蒙古の使者黑的を説得し渡日を止めさせたこと、⁴¹元宗が宋君斐に命じ「且日本素與小邦、未嘗通好、但對馬島人時因貿易往來金州耳」と上奏させたこと、⁴²等に見られる、高麗側による様々な「事実隠蔽」工作が示している。ただしこれらの隠蔽工作も、フビライの側近くに仕える高麗人趙彝(金州咸安郡出身)が様々な「情報提供」をしたようで、⁴³半ば公然の秘密と化していた。そんな中、日本船が金州に來航し、必死に隠蔽工作するも、洪茶丘に嗅ぎ付けられ、責任追及を受けた挙げ句に、フビライに報告し

ようとした。ただし、元宗に慰諭されて報告しなかった、とされているのは「世家二十七」とは違っている。そしてこの年の十月己亥に、曹子一は洪茶丘によって殺害されている。⁴⁴その理由は明記されていないが、隠蔽工作発覚の余波によるものであろう。

さて、この曹子一による隠蔽工作の背後にはどのような意味が隠されているのか。七月甲子と十月己亥の史料をみると、「倭船」が金州に来たこと、「交通」の露見を恐れたこと、「密令還國」めた曹子一が殺害されていることに注意を向けなくてはならない。まず「倭船」であるが、これだけではどのような性質の船かは不明である。李領氏によると、『高麗史』では日本を表す語として、「日本」と「倭」の二種の表記があり、「日本」を公式的名称として、「倭」をネガティブな意味（敵対・恐怖・蔑視）を持つ非公式的名称として使い分けがされていたことを指摘している。⁴⁵それに従うと、「倭寇の船」あたりの解釈が適当であろう。ところが「交通」という語がそれに続くため、「倭船」を倭寇の船と解釈するのは適当でない。「交通」を文字通り解釈すれば、従来から続けられている私的交流・地域的交流であり、私的貿易、つまり進奉船であろう。そしてその「交通」目的で来た「倭船」を、現地監督者であり「密令還國」めるよう指示した曹子一が、恐らくこのことが原因で洪茶丘に殺害された。これには二通りの解釈が成り立つ。一つは、隠蔽工作がもう少しで露呈しそうになったことの責任問題の発生、もう一つは「密令還國」めたという措置が問題になったこと、である。前者は、洪茶丘が元宗の頼みによりフビライの耳に入れなかった代わりに、曹子一に泥をかぶらせたという解釈である。後者は、洪茶丘が「高麗與倭相通」と奏上しようとしていたことに注目したい。この表現は、あたかも高麗が日本と共謀して元への謀叛を企てているように聞こえる。つまり、「密令還」めるのではなく捕縛または撃退し、日本との「相通」じている疑惑を晴らすべきであった。しかし日本人を密かに帰国させたことについての責任問題が問われた、という推測である。

この曹子一事件以後高麗が滅亡するまでの百二十年近くの間、日本と高麗の私的交流（貿易）の事実は殆んど見え

なくなる。交流や貿易どころか、倭寇の活動がいよいよ本格化し、日麗間は全くの緊張状態へと突入していく。⁽⁴⁶⁾そこから考察すると、日本との「交通」の事実がこの時発覚しそうになり、元朝の目を憚った高麗政府により私的交流（貿易）を禁止する方針が取られたのではないか。そのように考えると、この時の「倭船」が進奉船の最後のものがあり、追いつかれ不成功に終わったことを以てその終焉を迎えたのではなからうか。それ以後は蒙古襲来の緊張と相手国への警戒の念が長期に渡って持続していったため、貿易はもちろん、漂流民送還といった友好事業さえ難しかったのではないかと思われる。やがて倭寇活動が活発化していくのは、日本国内の事情（南北朝の内乱期）ということもさることながら、私的交流を許さない強硬な高麗の態度に不満が持たれたという一因もあつたからではないか。それは先の一二〇六年以後、一時進奉貿易が廃絶された際に倭寇が発生したと同じ理由である。一二二七年に武藤資頼の要請によって進奉貿易は復活したものの、曹子一事件では高麗は元朝の目を意識せざるを得なくなり、日麗関係の断絶は決定的になつたのではないか。この一二七二年を以て進奉関係（平和的地域外交）は終焉を迎え、これ以後全くの緊張関係（暴力的地域外交）の時代になつたと考えられる。

二、三別抄の対日外交姿勢

悪化していく日麗関係でもうひとつ注目すべきは、三別抄サムビョクシヨと日本との関係である。高麗武人政権の私的軍事勢力とも言うべき三別抄は、元宗の開京帰還に従わずに一二七〇年に王族の王温ワンジュンを擁立し高麗正統政府を自認した。彼等は珍島チンドや耽羅島タムナド（済州島チユジュド）を転戦するも、元・高麗連合軍により一二七三年に滅ぼされた。この三別抄が一二七一年に日本に救援依頼をしていたことが、石井正敏氏の研究により明らかとなつた。⁽⁴⁷⁾三別抄については、その他にも村井章介氏や李領氏の研究がある。⁽⁴⁸⁾

この三別抄が対倭寇警護の任についていたことはあまり知られていない。元宗六年（一二六五）七月には、秋七月丁未朔、倭寇南道沿海州郡、命將軍安洪敏等率三別抄軍禦之、⁽⁴⁹⁾

という事件があった。南道沿海州郡に攻め寄せた倭寇を、安洪敏將軍率いる三別抄に防禦させているのである。文面では把握しづらいが、恐らく実際に交戦されたものと思われる。約四年後の元宗十年（一二六九）五月には、

五月丙午、慶尚道按察使馳報濟州人漂風至日本還言、日本具兵船將寇我、於是遣三別抄及大角班巡戌海邊、又令沿海郡縣管城積穀移彰善縣所藏國史於珍島、⁽⁵⁰⁾

という記事が見える。日本が攻めてくるという噂が出てくるのは、既にモンゴル帝国（元）による日本通好交渉が開始されているからである。李領氏の説く「日本」と「倭」の使い分けについてであるが、ここではネガティブな対日観にもかかわらず、「倭」ではなく「日本」と表記されている。その理由はわからない。この時はあくまで噂で終わったが、海上の警護には三別抄と大角班^{テエカクバン}が担当している。それから約二年後の一二七一年（文永八年、元宗十二年）九月に三別抄からの救援依頼が日本に届くことになる。

村井章介氏は三別抄が日本に救援依頼した理由として、先の日本人と交戦した二例に触れて「それを通じてかれらは、単純な憎悪や蔑視にとどまらず、海船をあやつる戦闘にたくみな日本人の特質を理解したのであろう」と推測し、「三別抄が朝鮮南辺の海上警固にたずさわるなかで、しだいに日本の存在を発見し、理解しつつあったことも忘れてはなるまい」と解説している。また、「日本側の外交決定に有用な情報を提供」し、「漂風人護送」のような、平等互恵の国際慣行の遵守を提起し⁽⁵¹⁾た等の事実に触れ、「三別抄は、日本との間に対等・平等の国際関係を構想しうる視野を獲得していた」と説いている。

李領氏は、三別抄が「高麗の正統的政府を自負していた」ので、このような「漂風人護送」等は「三別抄としては至極当然の行動であった」と解説している。つまり、「武臣政権を武力で支えていた三別抄が、対馬および大宰府と

自国との関係を知らなかったとは考えられない」とし、かつての日麗平和的交流をその理想としたため、日本にコンタクトを取ったものとしている。⁵²⁾

しかし、三別抄が日本にコンタクトを求める経緯には、恐らくより切羽詰まった事情があったのではないかと思う。李領氏の言うような高麗正統政府としての当然の義務、といった悠長なものではなく、窮乏を打開するためのなりふり構わぬ救援要請だったのではないか。というのも、もし彼等が日本の実力（軍事力）を認め、味方につける意志があったなら、もっと早い段階でこの使者が派遣されたのではなからうか。

彼等が最初に「叛乱」を起こしたのは、元宗十一年（一二七〇）六月であった。⁵³⁾ 彼等は珍島に籠もるも、翌十二年（一二七二）年五月には元の大軍によって珍島を攻略され、旗頭の王温は戦死し、耽羅島に逃げ込む有様であった。彼等はそこから驚異的な粘りを見せ、二年近く持ちこたえるのだが、日本への救援要請は「珍島戦敗北」から約四ヵ月後のことである。つまり、当初から日本の実力に注目していたのならば、「旗揚げ」直後に「共闘要請」を出しているのではないだろうか。耽羅島に逃げ込んだ後に日本に救援要請していることを考えると、私にはどうしても切羽詰まったなりふり構わぬ救援要請にしか見えないのである。若しくは、耽羅島に移ったことで地理的に日本に近くなり、元にも生意気な態度を見せている日本という国の存在を思い出し、成り行きで救援要請をした、という推測も出来る。⁵⁴⁾

村井氏は、三別抄が日本との交戦を通して、「単純な憎悪や蔑視にとどまらず、海船をあやつる戦闘にたくみな日本人の特質を理解したであろう」と推測している。⁵⁴⁾ 興味深い推測だが、当時の倭寇がそれほど海戦に長けていたのか疑問である。李領氏は「十三世紀の倭寇」と「庚寅年以降の倭寇」との比較検討しているが、「十三世紀の倭寇」は小規模であり、それゆえ「高麗軍の攻撃の前に全員逮捕されるか、あるいは斬られることが多かった」としている。⁵⁵⁾ 確かにこれら初期倭寇は逮捕・殺害といった記事が多く見られる。つまり高麗軍にとって、倭寇は戦えばそれほど脅

威的な存在ではなかったのではないか。ただし神出鬼没で高麗軍の目を盗んで出沒し、なるべく交戦を避けて逃亡するような存在であり、言うなれば撃退は容易であるが非常に煩わしい存在ではなかったかと思う。

一二六五年と一二六九年の三別抄の対倭寇警戒活動は、言うまでもなく「高麗政府」の一員としてのものであった。対して、一二七一年の日本への救援要請の時は、彼等は「自称高麗正統政府」であり、大敗した後の苦しい状況であった。この二者では、対日観が違っていても不思議ではない。前者では、高麗精銳軍として、倭人に対して蔑視し、憎悪の念をたぎらせたことだろう。後者では、元に生意気な態度を見せている日本の存在を思い出し、「敵の敵は味方」の論理で救援要請したのではないかと思う。村井氏の言うように「平等互恵の国際慣行の遵守」が彼等の頭にはあったであろうし、李領氏の言うように「正統政府としての当然の行為」としての外交姿勢だったのだろう。しかし何よりも、漂流民の送還と情報提供といった「対等善隣外交の提唱」には「支援を得る手土産」という生々しい意義があったように思えてならない。

また李領氏は、三別抄が高麗と大宰府との良好な関係を知らなかったとは考えられまいとし、そのため日本との善隣外交を推進しようとしたとしているが、私にはその論説は一面で正しく、別の一面では正しくないと思われる。同氏の言うように対馬・大宰府といった日本の地方官は確かに善隣外交を推進してきたのは既に見たとおりであり、確かにその方針を三別抄は知っていたであろう。しかし反面、彼等は玄界灘海民の倭寇行為を実際に防いでいるわけで、「倭人」の負の側面をも知っていた筈である。言うなれば、「日本人」の地方官の善隣交流への親近感と、「倭人」の海民への警戒の念といった相反する感情を日本人に対して抱いていたのではないか。李氏の説では、あまりに「日本人」地方官への「善隣交流」しか存在しなかったように聞こえる。「倭人」海民の「暴行」を目にする機会の多い三別抄には、「日本人（倭人）」には愛憎常ならぬ複雑な思いを持っていたのではなからうか。「日本」の大宰府に救援を求めるにあたり、「倭人」への反感もあって、おそらく反対意見も出されたのではないかと思うのである。まとめると、

三別抄の救援依頼は、正の感情（対馬・大宰府への親近感）だけで送られたのではなく、負の感情（倭寇への憎悪）も入り交じっており、大敗後の体制挽回のためにやむを得ず出されたという性質ではないかと思う。

むすびにかえて

日麗関係を、その性質から大まかに分類すると、前期（平和的外交期、十〜十二世紀）・中期（外交関係悪化期、十三世紀前中期）・後期（暴力的外交期、十三世紀後期〜十四世紀）の三つに分類できると思う。今回は中期に相当する部分を見て、如何にして日麗関係が悪化していったのかを考察した。主題が違うせいも、前期の私献・進奉貿易と後期の倭寇については殆ど説明できなかったのが悔やまれる。また、今回は「地方」の外交を考察したが、「中央（朝廷）」の対高麗観に触れられなかったのも反省点である。

今回私が提示した日麗関係悪化のポイントとして、①日本側の対麗外交態度に弛緩があり、それが原因で一時的に高麗から進奉貿易を廃絶されるに至った、②貿易中絶により玄界灘海民が窮乏に陥り、倭寇という暴力手段に訴えるようになった、③日・麗ともに地方官レベルでは善隣交流を目指していた。特に、武藤資頼の、高麗政府の顔を立てつつ玄界灘海民の不満を解消させた外交手腕はもつと評価されてもよいものである、④高麗が元朝の目を憚ったことにより日本船を追い返した一二七二年が最後の進奉船となり、以後両国は全くの緊張関係となった、⑤三別抄の対日救援依頼は珍島敗戦後の体制立て直しのためであって従来言われている程日本を重視していた訳ではない、等が挙げられる。善隣外交を目指す両国の地方官と高麗への倭寇活動をする玄界灘海民とのギャップ、さらに、中央（朝廷または幕府、元朝または高麗政府）と地方（大宰府、高麗地方官）との外交意識の温度差、等の事項により両国間は徐々に悪化していき、元の対日強硬姿勢によって善隣外交・進奉貿易は全く終焉したものと思われる。

ただし解明されていない問題点も存在している。蒙古襲来以後、元・麗ともに国交は結ばれなかったが、民間貿易や准公的な神社造営料唐船（天竜寺船に代表される）は頻繁に元に送られている。一九七六年に韓国・全羅南道新安郡沖海底で発見された新安沈没船は日・麗・元の三方国を結ぶものであった。このように、日元貿易の振興と日麗貿易の不振が全く相反しているのは不自然で、検討を加える必要がある。

村井章介氏は国境をまたぐ人々を民俗学で「マージナル・マン」と呼ばれていることを紹介している。⁹⁶ また、ブルース・バートン氏は国境に相当する概念として「フロンティア」と「バウンダリー」の二語を紹介している。⁹⁷ 明確に国境線が定められた近代以降と違って、この時期は曖昧に空間として把握されている「フロンティア」であった。玄界灘・黄海周辺の海民の生き様はまさしく「マージナル・マン」にふさわしいものであり、国家間のヒト・モノ・カネ・情報の移動は頻繁に行われていた。私猷・進奉貿易もそうであるし、倭寇もそうであった。このような「フロンティア」に相当する地域では、「辺境の多国籍性」と「多国籍性もたらず交流と摩擦」は不可分であり、両者は密接につながっている。ひとくちに「政治経済」などとよく言われるが、「政治」、すなわち「官」の立場では他国を拒絶していても、「経済」、つまり「民」の立場では一向に構わず広域活動を繰り広げたわけで、周辺地域ではこの二語は必ずしも一致しない。このような「官」と「民」との差異、さらに「中央」と「地方」とのギャップが、「交流」と「摩擦」の入り交じった複雑な国際交流をなしている。このような「フロンティア」と呼ばれる境界を見る際には、以上のような点に注意しながら研究する必要がある。それは朝鮮半島に限らず、日中間関係史を見る上でも同じなのは言うまでもない。日麗関係悪化の経緯を微視的に見て、そのように感じた次第である。

註

- (1) 青山公亮『日麗交渉史の研究』（明治大学文学部研究所、一九五五年）、森克己『新訂日宋貿易の研究』、同『続日宋貿易の研究』、同『続々日宋貿易の研究』（『森克己著作集』一巻～三巻、国書刊行会、いずれも一九七五年）。
- (2) 李領『倭寇と日麗関係史』（東京大学出版会、一九九九年）。
- (3) 註(10) 参照。
- (4) 註(2) 李領氏著作の六十六～六十七頁。
- (5) 例えば、杵岐から藤井安国等三十三人を遣わし方物を献じたこと、『高麗史』世家九、文宗二十七年七月丙午条、薩摩から使が遣わされ方物を献上したこと（『高麗史』世家九、文宗三十四年閏月（閏八月）庚子条）、筑前州の「商客」信通らが水銀二百五十斤を高麗国に献上したこと（『高麗史』世家十、宣宗元年六月戊午条、等）に見える。
- (6) 『高麗史』世家二十五、元宗四年四月甲寅条。
- (7) 被虜朝鮮人送還による回賜貿易とそれに関与した地域については、関周一氏の研究に詳しい。同『中世日朝海域史の研究』（吉川弘文館、二〇〇二年）を参照。
- (8) 確認出来る私献貿易の初見は、『高麗史』世家九、文宗二十七年（二〇七三）七月丙午条の、日本人王則貞・松永年等四十二人が螺鈿・鞍橋・刀・鏡等を献上したこと、同じく杵岐の勾当官が藤井安国等三十三人を遣わし方物を献じたこと、等である。それ以前は、対馬が高麗の漂流民を送還した結果として礼物を賜るといふ例がいくつか見える（例えば『高麗史』世家八、文宗十四年七月癸丑条）が、それらの使者は最初から献上目的として派遣された訳ではない。
- (9) 「倭寇」の語が確認出来る最初の高句麗コグリョの好太王ホテワンの碑文（第三面）に見えるものだが、その「倭寇」と中世の「倭寇」が全く異質なものであるのは明白であるので、ここではこの事例を紹介するのみで除外しておく。
- (10) 『高麗史』世家二十一、高宗十年（一二二三）五月甲子条。
- (11) 田中健夫『倭寇―海の歴史』（教育社、一九八二年）、十五頁。
- (12) 註(11) 田中氏著作の二十六頁。
- (13) 註(2) 李領氏著作六十六頁。

- (14) 『吾妻鏡』 文治二年五月二十日条。
- (15) 註(1) 青山氏著作二十五頁。
- (16) 註(1) 青山氏著作二十八頁。
- (17) 『高麗史』 世家二十二、高宗十二年四月戊戌条
- (18) 『高麗史』 世家二十二、高宗十三年正月丁丑条
- (19) 『高麗史』 世家二十二、高宗十三年六月甲申条、『吾妻鏡』 嘉祿三年(安貞元年) 五月十四日条(吉川本、北条本にはなし)、
『明月記』 嘉祿二年十月十七日条、等。
- (20) 『高麗史』 世家二十二、高宗十四年五月庚戌・乙丑条、註(19)の『吾妻鏡』の記事。
- (21) 註(19)の『吾妻鏡』の記事。
- (22) 註(20)の『高麗史』の記事の、五月乙丑条。
- (23) 『百鍊抄』 嘉祿三年(安貞元年) 七月廿一日条
- (24) 『吾妻鏡』 嘉祿三年(安貞元年) 四月廿三日条。
- (25) 註(2) 李領氏著作の六十五頁。
- (26) 『吾妻鏡』 貞永元年閏九月十七日条。
- (27) 『高麗史』 世家二十五、元宗四年二月癸酉条。
- (28) 『高麗史』 世家二十六、元宗六年七月丁未条。
- (29) 『百鍊抄』 延応二年四月三日条、『平戸記』 延応二年四月十二日〜十七日条。
- (30) 『高麗史』 世家二十四、高宗四十六年七月庚午条。
- (31) 註(6) 参照。
- (32) 註(27) 参照。
- (33) 註(6) 参照。
- (34) 『高麗史』 世家二十五、元宗四年六月是月条。
- (35) 『高麗史』 世家二十五、元宗四年七月乙巳条。

- (36) 『高麗史』世家二十五、元宗四年八月戊申朔条。
- (37) 註(2) 李領氏著作の七十一頁。
- (38) 註(2) 李領氏著作の七十二頁。
- (39) 『高麗史』世家二十七、元宗十三年七月甲子条。
- (40) 『高麗史』列伝四十三、「洪福源」。
- (41) 註(2) 李領氏著作第三章第二節「李咸用」を参照。
- (42) 『高麗史』世家二十六、元宗八年春正月条。
- (43) 『高麗史』世家二十六、元宗七年十一月癸丑条。なお、註(2) 李領氏著作第三章第一節「趙彝」も参照。
- (44) 『高麗史』世家二十七、元宗十三年十月己亥条。
- (45) 註(2) 李領氏著作二百二十～二百二十四頁。
- (46) 前期倭寇が日本人のみによって構成されていた訳ではなく、高麗の賤民も加わっていたことは、田中健夫氏の研究によって明白である(同「倭寇と東アジア交通圏」、「日本の社会史」一、岩波書店、一九八七年)。よって、倭寇による日麗間の緊張状態は、大部分は日本人の倭寇によるものであるが、一部は高麗人関与もあったことにも留意しておかねばなるまい。なお、本論文で扱っている倭寇は、武藤資頼が悪徒九十人を斬首したことや、日本側が賠償を支払っていることから、日本人によるものであったと思われる。
- (47) 石井正敏「文永八年來日の高麗使について——三別抄の日本通交史料の紹介——」(『東京大学史料編纂所報』十二号、一九七八年)
- (48) 村井章介「高麗・三別抄の叛乱と蒙古襲來前夜の日本」(同『アジアの中の中世日本』所収、校倉書房、一九八八年)、註(2) 李領氏著作第三章第三節「三別抄」。
- (49) 『高麗史』世家二十六、元宗六年七月丁未条。
- (50) 『高麗史』世家二十六、元宗十年五月丙午条。
- (51) 註(48) 村井氏著作百六十五～百六十六頁。
- (52) 註(2) 李領氏著作百四頁。

- (53) 『高麗史』 世家二十六、元宗十一年六月己巳条。
- (54) 註(48) 村井氏著作百六十六頁。
- (55) 註(2) 李頴氏著作百二十二頁。
- (56) 村井章介『中世倭人伝』(岩波書店、一九九三年)、四〇五頁。
- (57) ブルース・バートン『日本の「境界」―前近代の国家・民族・文化』(青木書店、二〇〇〇年)。